

## 築造方法から見た横穴式古墳の研究（畿内地域を中心に）

李東奎

横穴式古墳の築造方法は、埋蔵主体施設である石室と石槨だけでなく、古墳築造に関連する様々な要素（墳丘、石室、墓域施設など）がある。本稿では、横穴式古墳の各要素における様々な築造方法とそこから抽出できる意味を探ることに重点を置き、畿内地域を中心に百済から横穴式古墳が初めて導入された5C後半から古墳の築造が終了する8C初頭までの横穴式古墳を検討する。

中国の東北地方（2C中葉）に登場した横穴式石室は、様々な構造と築造形態が一挙に、楽浪と帯方に移住した移民によって、楽浪・帯方（3C前半）に伝えられ、3C末～4C初頭を経て、ある程度定型化した横穴式石室（板橋型に似ている）が造営される。そして、百済の中央地域（4C中葉後期）に導入された当時から完成していた形態の板橋型石室が倭の畿内地域（5C後半）に登場する。初期横穴式石室は短時間で日本の支配層の新しい墓制として受け入れられた。そして在地化が行われる過程で、弥生時代の大型墳丘墓から受け継がれた、伝統的な墳丘、規模を重視する墳丘、竪穴式埋葬主体施設の位置が結合することにより、他地域での導入後に展開する様相は、従来とは異なる変化を示す。

日本の支配層の横穴式古墳は巨大な墳丘（前方後円墳）内部に埋葬主体施設の石室と石槨が位置する地上式の構造（地面または地面より上部）を持つが、この部分が他国と最も大きな違いを示している（石室の立地）。石室は墳丘内部での位置が変化し、墓域に樹立された埴輪も種類と数量の違いが確認できるが、これは造営時期と関連がある。このような変化について既存の研究史において、様々な観点から多角的な解釈がなされてきたが、主に一つの観点だけを重点的に扱ったため、ある一定以上の時代背景を理解するには限界がある。そこで、様々な観点の中で死生観（白鳥伝説など-黄泉国-仏教）・心性面（墓制：進歩的、儀礼：保守的、在地化の程度）・技術（墳丘、石室間の技術的均衡）を重点的に併せて検討した。その結果、各観点間でどのような影響を与えるのか、展開過程で共通点と差異点はあるのか、特定時期（画期）にはどのような変化を示すのかなどを総合して比較する契機となった。そして各観点が有機的につながり、有意義な結果となっていることが確認された。とくに技術的な面に注目して、土木技術的な観点から墳丘と石室を総合的に検討した結果、古墳の造営と変遷過程には技術面において現実的な苦悩があったことがわかった。技術的な限界を克服し、調和する過程で古墳の観念的な部分を具現化するためには、技術的な部分が伴わなければ実現できない。実際、技術的欠陥により古墳が崩壊する事例もあるため、観念的な部分（ここでは死生観と心性面）以上に技術的な部分が多くを占めていたことが確認された。

次に、奥壁と側壁の用石法により現れた表・裏の様相を中心に、石室の構造が時期別に変化する過程を検討した。横穴式石室の構造を効果的に検討するためには、表面より裏面の様相のほうが構造を把握しやすいため、裏面の用石法および様相に注目した。板橋型石室から初期横穴式石室、畿内型石室に至るまで検討した結果、石材の大きさは変化する幅が大きく、築造方法はほとんど変わらないことが確認された。また、表面に現れる様相に基づき、石室の用石法と構造を説明することと、実際に裏面から検討された様相（表面と裏面に見える石材の大きさ、加工形態、築造形態）とは異なる点が確認されており、今後、横穴式石室における壁体構造に対する再検討が望まれる。一方、6C第3四半期～7C前半に編年される横穴式石室の中には、奥壁の1段目はもちろん、2段目までもすべて立積されたものがある。これは側壁では確認できない様相であり、石室規模の大型化、特に石室の天井が急激に高くなることと関連がある。ところで、建築工学的観点から考えると、奥壁の2段目までもすべて立積する場合、構造的には様々な方向からの圧力に対して脆弱になる。また、奥壁（非耐力壁）の2段目は、自立できないという構造的脆弱性がある。そのため側壁に寄りかけて積み上げられ、石室の天井を含む、墳丘の荷重を実際に支えるのが、おもに側壁（耐力壁）であったことが、側壁の石材がさらに巨石化した原因の一つと考えられる。

古墳時代の終末期に築造された古墳の中で、一系統に分類される磚積式古墳は、1913年に初めて存在が紹介されて以来、様々な観点（用語、類型、系譜、分布範囲、築造時期、榛原石（石種と採石場）、工人、被葬者、双墳など）において研究が行われてきた。しかし、現在においても名称がきちんと統一されていないなど、長期間の研究と多様なテーマの研究にもかかわらず、研究者間で合意に至っていない部分が依然として多数存在するため、既存の研究史から再検討が必要な部分も確認される。そこで直接観察することにより、既存の研究の中から、再検討が最も必要と考えられるいくつかの用語・石材・類型設定を選定し、再検討を進めた。用語に関しては、磚積式古墳とこれより下位の概念として、磚積式石槨、磚積式石室という用語を提案した。次に石材について再検討した。榛原石と室生火山岩の用語使用問題と地質帯の全く異なる石材が主石材として使われている古墳などの事例から、磚積式古墳の築造に使われた石材は榛原石または室生火山岩であるという等式は成立しなくなった。また、地域ごとに石材加工度、漆喰の使用有無、石種の多様性が確認され、時期・地域ごとに磚積式古墳間では階層差が重要な要素となることを確認した。最後に、類型設定および編年については、磚状の石材で築造するという共通点のほかに、磚積式古墳の間には特に関連する点が見つからない。このため、類型設定はあまり意味を持たず、7C前半の宇陀市での登場-7C中葉の宇陀市と桜井市に集中して築造（漆喰使用が始まる）-7C後半の明日香村での築造（石材の石種の変化）、それ以外の地域は築造終了という、地域と時期を拡大した新たな編年案を提示するなど、それ以前とは異なる結果が多数確認された。

古墳の新しい築造工程である版築を用いた墳丘版築古墳は、韓国(7C前半後期)と日本(7C中葉後期)で確認された。韓国では双陵が唯一の例として知られているが、双陵発掘調査の結果や弥勒寺址（寺院）の中でも石塔に関する研究、そして武王と当時の状況などを総合して検討した結果、双陵の全体構造は弥勒寺址の敷地造成、特に石塔の基壇部築造工程に類似していることが確認された。また、

埋葬主体施設（石室）の位置と構造が、同時期の百済の塔との類似性が確認される。すなわち、双陵は塔のモチーフ（構造と意味）を借用して築造されており、版築は塔楼（塔身）を表現していると推定される。一方、日本では王（天皇）や王族に分類される最上位の古墳を中心に、墳丘全体に版築が用いられている。様々な墳形（八角墳、円墳、方墳）が確認されているが、墳丘の築造構造と工程は同じである。7C後半になると、墳丘下段または一部のみ版築が用いられた古墳と、墳丘全体に版築が用いられた古墳との違いが確認できる。そして、その違いは仏教寺院における敷地造営技術の変化、特に塔基壇部との類似性に注目した研究が韓国と同様、日本でもみられる。王（天皇）だけが使用できる八角墳の登場について、文献、考古学、当時の時代状況などから提起された様々な諸説を検討した結果、八角形の墳丘の出現は塔楼（塔身）を意図した可能性が高いことが確認された。また、墳丘版築古墳の技術的土台と意味については、当時の仏教が東アジアにおいて王権中心の中央集権体制のために活用された側面が強いため、仏教を基盤に王権強化を最も象徴的に示す構造物であると判断した。

古墳時代後期～終末期に畿内地域に登場した横穴式古墳は、古墳の要素別または時期別に多様な変遷を示している。このような過程を通じて分かったことは、横穴式古墳は畿内地域の支配層の政治的・社会的な要求により戦略的に導入された墓制ということである。つまり、在地化により加味された墳丘の墳形と規模を通じて、内部統合および他地域との格差を示しながらも、内部主体施設である横穴式の石室と石槨を通じて東アジアの秩序に組み込まれていることを内外に誇示する効果的な建築物ということである。また、古墳の築造により新しい技術と思想を取り入れ続け、形態が変化していき、畿内中心の古代国家体制が完備され、古墳の築造が終了する8C初頭まで造営された代表的な墓制といえる。